

【B年】復活節第6主日(2022年5月22日)

【旧約聖書日課】創世記 18章23～33節

²³アブラハムは進み出て言った。

「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。²⁴あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお救しにはならないのですか。²⁵正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」

²⁶主は言われた。

「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を救そう。」

²⁷アブラハムは答えた。

「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。²⁸もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」

主は言われた。

「もし、四十五人いれば滅ぼさない。」

²⁹アブラハムは重ねて言った。

「もしかすると、四十人しかいないかもしれません。」

主は言われた。

「その四十人のためにわたしはそれをしない。」

³⁰アブラハムは言った。

「主よ、どうかお怒りにならずに、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」

主は言われた。

「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」

³¹アブラハムは言った。

「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれません。」

主は言われた。

「その二十人のためにわたしは滅ぼさない。」

³²アブラハムは言った。

「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」

主は言われた。

「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」

³³主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。

アブラハムも自分の住まいに帰った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章22～27節

²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。

²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われる

ことを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

²⁶同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁷人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 16章12～24節

¹²言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。¹³しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。¹⁴その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。¹⁵父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。

¹⁶「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」¹⁷そこで、弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。』¹⁸また、言った。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」¹⁹イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。²⁰はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。²¹女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。²²ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。²³その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言っておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。²⁴今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 18章23～33節

23アブラハムは進み出て言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者と共に滅ぼされるのですか。24もしかすると、あの町の中には正しい人が五十人いるかもしれません。その中に五十人の正しい人がいても、その町を赦さず、本当に滅ぼされるのでしょうか。25正しい者を悪い者と共に殺し、正しい者と悪い者が同じような目に遭うなどということは、決してありません。全地を裁かれる方が公正な裁きを行わないことなど、決してありません。」26主は言われた。「もしソドムの町の中に五十人の正しい者がいるなら、その者のために、その町全部を赦すことにしよう。」27アブラハムは答えた。「塵や灰にすぎない私ですが、あえてわが主に申し上げます。28もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたはその五人のために、町全体を滅ぼされるのでしょうか。」すると主は言われた。「もしそこに四十五人いるとすれば、私は滅ぼしはしない。」29彼はなおも重ねて主に語りかけて言った。「もしかすると、そこには四十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その四十人のために、私は何もしない。」30彼は言った。「わが主よ、こう申しあげてもどうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「もしそこに三十人いるなら、私は何もしない。」31彼は言った。「あえてわが主に申し上げます。もしかすると、そこには二十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その二十人のために、私は滅ぼしはしない。」32彼は言った。「わが主よ、もう一度だけ申し上げても、どうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その十人のために、私は滅ぼしはしない。」33主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムは自分の住まいに帰って行った。

ローマの信徒への手紙 8章22～27節

22実に、被造物全体が今日に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています。23被造物だけでなく、霊の初穂を持っている私たちも、子にさせていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。24私たちは、この希望のうちに救われているのです。現に見ている希望は希望ではありません。現に見ているものを、誰がなお望むのでしょうか。25まだ見えないものを望んでいるのなら、私たちは忍耐して待ち望むのです。

26霊もまた同じように、弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してくださるからです。27人の心を見極める方は、霊の思いが何であるかを知っておられます。霊は、神の御心に従って聖なる者のために執り成してくださるからです。

ヨハネによる福音書 16章12～24節

12言っておきたいことはまだたくさんあるが、あなたがたは今それに堪えられない。13しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる。その方は、勝手に〔直訳→自分から〕語るのではなく、聞いたことを語り、これから起こることをあなたがたに告げるからである。14その方は私に栄光を与える。私のものを受けて、あなたがたに告げるからである。15父が持っておられるものはすべて、私のものである。だから、私は、『その方が私のものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

16「しばらくすると、あなたがたはもう私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる。」17そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたは私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」18また、言った。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」19イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたは私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる』と、私が言ったことについて、論じ合っているのか。20よくよく言うておく。あなたがたは泣き悲しむが、世は喜ぶ。あなたがたは苦しみにさいなまれるが、その苦しみは喜びに変わる。21女が子どもを産むときには、苦しみがあがる。その時が来たからである。しかし、子どもが生まれると、一人の人が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。22このように、あなたがたにも、今は苦しみがあがる。しかし、私は再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。23その日には、あなたがたが私に尋ねることは、何もない。よくよく言うておく。あなたがたが私の名によって願うなら、父は何でも与えてくださる。24今までは、あなたがたは私の名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・5月22日「復活節第6主日」の日課主題は「父のみもとへ行く」。「復活日(イースター)」から40日目は主イエスが天に昇られたことを記念する「昇天日」となるが、これは「使徒言行録」1章の記事に基づくもので、「昇天」の出来事を具体的に描写して伝えているのは「ルカ・使徒言行録」のみである。一方、「ヨハネ福音書」には、主イエスが「父のもとに行かれる」ことや「上げられる」ことを予告される御言葉が伝えられている。

・福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、聖霊(真理の霊)の約束に続いて主イエスがご自身の去られることを告げられる箇所。旧約聖書日課は、「創世記」から、アブラハムがもてなした三人の旅人を見送る中でソドムの町を滅ぼす主のご計画を知り、主にソドムの人々のとりなしを願う場面から。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「霊」のとりなしの働きについて述べる箇所。

旧約日課(創世記18章より)

・「創世記」は、ユダヤ正典「律法」の第一巻であり、「聖書」全体の第一の書にも位置づけられる。正典「律法」は、第二巻「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」を本編とし、いわば本編に先立つ「前史・プロローグ」として「創世記」を置いた構成となっており、実際、「創世記」と「出エジプト記」の間には物語進行上、約400年の空白期間が想定されている。おそらく、前6世紀に正典「律法と預言者」が編纂された際、「ユダヤ共同体」のルーツとして「モーセ物語」に描かれる「シナイ契約」が神学的基礎づけとされながら、同時に、さらに古い、かつ周辺諸民族にとっても共通の、古い「世界創世神話」や「始祖伝承」を取り込む意図で、「創世記」が置かれたのだろう。特に、「創世記」後半に伝えられる「ヤコブ＝イスラエル伝承物語」(25～50章)は、かつての北王国イスラエルを基礎づける地域固有の伝承として、重要な意味を与えられて編集されたものと推認される。一方、「ヤコブ＝イスラエル伝承物語」に先立つ「アブラハム物語」(12～25章)は、南王国ユダの地域との関連性が示唆される一方、より広範な周辺諸民族と共通の「始祖伝承」としての性格を有するものと考えられる。

・日課箇所は、「アブラハム物語」の中で、一つの重要な転換点を描く場面(17～19章)の一部である。この場面は、後継相続者の定まらないアブラハムに対して、妻サラとの間の子「イサク」の誕生予告が主ご自身によって告げられるところから始まり、続いて三人の旅人によって、より具体的な誕生予告が告げられる、という内容で前半が進行する。この前半部の中では、「イサク」に先だって女奴隷ハガルとの間に生まれていた息子「イシュマエル」の処遇が取り上げられているが、物語後半部では、「ソドム」の滅びの出来事を通して、アブラハムが当初相続者として想定していたと

考えられる甥「ロト」に対する神の扱いが取り上げられるのである。

・「ソドム」は、は「ゴモラ」と共に、死海ほとりの古い都市として栄えながら滅んでしまった都市として伝えられる。滅びの理由を、「創世記」は、その都市の人々の悪徳に対する天罰とみなしている(実際には、天災が直接の原因であると推察される)。「アブラハム物語」においては、当初の相続予定者とみられた「ロト」がアブラハムと別れた後に移住したのが「ソドム」であったとされており(13章)、アブラハムが主からこの町の滅びを告げられたときにとりなし願ったのも、「ロト」の家族に対するとりなしという側面を無視できない。「ソドム」がロトの住む町でなければ、アブラハムのとりなしをする動機は生じようがなかった。実際、日課箇所が描く「ソドム」に対するとりなしは、結果として、ただロトの家族を救い出すことにしか結びついていない。このようにして、日課箇所を含むこの場面全体は、アブラハムの正統な後継者として「イサク」の誕生が予告されるのに合わせて、アブラハムに連なる他の相続候補者である「イシュマエル」および「ロト」に対する神の処遇方針(彼らとその子孫に対する計画)が告げられるという、物語展開の転換点を構成するものとなっている。

・日課箇所は、「アブラハム物語」全体の中で位置づけに関わらず、一つの神学的問答として意義を見いだされてきた。すなわち、「神の人に対する義(正義)とはどのようなものか」という神学問題である。一般的な宗教課題として、絶対者としての神が正義の源泉であり、かつ正義遂行者として人や世界に賞罰を与える存在である、という仮定的前提がある(発展形として、悪の源泉であり、かつ悪の遂行者としての対立的神を想定する二神論も知られている)。一方で、神を人(あるいは部族・民族)の超越的守護者として位置づけることもなされてきた。この二つの焦点は、ときに対立する課題であり、守護者(救済者)としての神は、正義にもとる人間集団をどのように扱われるのか、ということが問われることになる。「創世記」は、「ノアの洪水伝承」の中で、悪者としての人間に対する絶滅の意志を持たない神を語っているが(8～9章)、日課箇所は、神が正義の遂行としての神罰行為をどこまで放棄されるのかを問うているのである。

使徒書日課(ローマ8章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の最初に置かれてきた書簡で、パウロの神学的思索をもっとも明瞭に表しているものとみなされてきた。パウロは、本書簡を、未訪のローマ教会に宛てており、個人的な関係の深い教会に宛てた他の書簡と比べて、より冷静かつ客観的な立場で執筆していると見ることは、妥当である。一方で、本書簡は、パウロがローマ教会訪問を願い、かつローマ訪問後のスペイン伝道計画への協力を求めるために著したものであり、その意図に沿った内容が扱われているのであるから、これを彼の神学体系の書とみなすのは無理がある。

・日課箇所、パウロは、「神の霊」の内在の意義を展開している。パウロが「霊(プネウマ)」を取り上げる場合、基本的には「肉(サルクス)」の対義語として対で扱い、「人に由来するもの」という意味で用いる「肉」に対して、「神に由来するもの」という概念的な意味で用いるのが通例である。パウロにとって信仰において「内在」すべきは「イエス・キリスト」であり、「聖霊」は、「神の(御心に基づいた)働き」が人にもたらされていることを示すために取り上げられるものである。一方で、「聖霊」に関する理解は、パウロの視点にとどまらずに初代教会で幅広くとらえられていたと考えられる。

・本書簡では、「霊(プネウマ)」は日課箇所を含む 8 章に集中しており(34 例中 21 例が 8 章。なお残り 13 例中 4 例は 15 章)、ここでパウロは、前段までで取り上げていた「内在する罪の問題」を解決する糸口として「神の霊」を取り上げている。しかし、ここで取り上げる「霊」は、極めて人格化された扱いがされており、パウロが他の書簡で取り上げる場合に抽象概念化される傾向のある「聖霊」とは異なる側面がある。特に「執り成し手」として扱われる日課箇所の「霊」は、「ヨハネ福音書」で扱われる「聖霊」との類似性が見られるものである。このような「聖霊」観が、パウロに由来するものなのか、すでに知られていたものをパウロが援用しているのかは、分からない。

福音書日課(ヨハネ 16 章より)

・日課箇所は、主イエスが十字架につけられる前の晩に弟子たちと過ごした最後のときに語られた教えの一部で、内容的には、ほぼ終結部と見ることができる。ここでは、主イエスが弟子たちの前から去られることによって弟子たちの間で始まる新しい事態が何であるかが告げられており、後段(16:25 節以下)や 17 章の主イエスの「祈り」で語られることの前提となっている。

・ここで主イエスが弟子たちに約束される「真理の霊」は、主イエスが去られた後に、主イエスに代わる「弁護者(パラクレートス)」として与えられると約束されるものである。「パラクレートス」は、「慰める・励ます」を意味する「パラカレオー」の派生語で、原義は「傍らで呼ぶ者」である。「新約」中、人格化された「パラクレートス」の用例は、「ヨハネ文書」のみで知られ(福音書で 4 例=14:16、14:26、15:26、16:7。手紙一で 1 例= I ヨハネ 2:1)、「ヨハネの教会共同体」に独自の聖霊理解の用語であったと推認される。一方で、動詞「パラカレオー」は、「ヨハネ文書」での用例が皆無である一方、「パウロ書簡」をはじめとする「新約」全般で広く用いられる用語である。これは、単に「ヨハネ文書」の用語法(語彙)の問題とも考えられるが、「パラカレオー」の源泉を主イエスの約束された「真理の霊」のみに見ようと意図するものとも考えられる。

・日課箇所中では、「しばらくすると(ミクロン)」が多用されている。この用語は、「マルコ福音書」などで多用される「すぐに(エウテュス)」などと比べると多義的な語で、用法としては曖昧なものである。

来週の誕生日 (5月22日~28日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-208 番「主なる神よ、夜は去りぬ」(= I 24「父のかみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。
- ・21-470 番「やさしい目が」(= III-8、こ-114)は、新しい創作讚美歌集として 1976 年に出版された『ともにおう』に採用された讚美歌で、中学英語教師の深沢秋子が作詞、作曲家で阿佐ヶ谷教会員・小山章三が作曲した。1983 年版『こどもさんびか2』、2002 年版『こどもさんびか改訂版』にも採用。
- ・21-448 番「お招きに応えました」は、20 世紀米国メソジスト教会牧師で 20 世紀後半の英語讚美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心的担い手となったグリーンが信仰告白式・堅信式のための讚美歌として作詞。曲は、教会旋法第 6 旋法による交唱聖歌(アンティフォナ)のための旋律で、17 世紀の歌集から用いられてきたもの。202 番と同曲。

21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」

Nocte surgentes vigilemus omnes

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

21-448「お招きに応えました」

Lord, We Have Come At Your Own Invitation

1. Lord, we have come at your own invitation, / Chosen by you, to be counted your friends; / Yours is the strength that sustains dedication, / Ours a commitment we know never ends.
2. Here, at your table, confirm our intention, / Give it your seal of forgiveness and grace; / Teach us to serve, without pride or pretension, / Lord, in your Kingdom, whatever our place.
3. When, at your table, each time of returning, / Vows are renewed and our courage restored: / May we increasingly glory in learning / All that it means to accept you as Lord.
4. So, in the world, were each duty assigned us / Gives us the chance to create or destroy, / Help us to make those decision that bind us, / Lord, to yourself, in obedience and joy.